

## 2. ウサギの歯の病気について

### 一歯の伸びすぎ

うさぎの歯は一生を通じて成長し続けます。と言うことはうさぎの歯は成長が止まらないのです。このことが問題になることがあります。うさぎの歯が伸びすぎているように見える場合の対処法を知っておくことで、深刻な問題の発生を防ぐことができます。

#### 歯が伸びすぎると、どんな問題が起こるか？

- 1) 食べなくなる、食べるのを嫌がる。
- 2) うまく噛むこともできないことがある。ゆっくりと食べるようになる。
- 3) 口からよだれを垂らすことが、多くなる。
- 4) 口をうまく閉じることが出来なくなる。
- 5) 痛みを感じるので、うずくまったり、歯ぎしりをすることがある。
- 6) 下の顎が腫れてくる、大きくなる、この原因は膿瘍が溜まる
- 7) 眼が大きくなる、眼が大きく前に出てくる、後ろの部分の膿瘍が原因。
- 8) 少しずつ体重が減少してきます。これは食欲不振の結果によります。

#### ウサギの歯は何本ありますか？

ウサギは 28 本の永久歯を持ち、その内訳は、切歯 6 本、前臼歯 10 本、後臼歯 12 本、

- ・ 上歯 → 切歯 4 本、前臼歯 6 本、後臼歯 6 本、
- ・ 下歯 → 切歯 2 本、前臼歯 4 本、後臼歯 6 本

ウサギを始め、ほとんどの草食動物は、歯肉の上下に**非常に長い歯が永遠に生え続けます**。前歯は切歯とか門歯と呼ばれ、前側なので最初に最も目立ちますが、ウサギには口の奥に臼歯とか後臼歯があり、これは見えにくいので問題になることがあります。

もしこれらの症状が現れたら、出来れば初めから積極的に治療を開始するほうが、予後に対して良い結果が得られます。もし慢性の状態になると、しばしば治療は長い期間を要します。

**干草（繊維質の植物）や牧草を食べ続けることによって、歯が削れます。**食べないと、臼歯が鋭いトゲを形成して頬や舌を傷つけるようになります。これにより痛みが生じ、食べるのを嫌がったり、食べられなくなったりします。

特に口の前にある前歯は、ひどい場合には丸まって生えてくるので、ウサギは口を閉じることができず、食べることができません。また長いのでゲージに引っかかったり、口の中に入り込んでしまい、食べるのをやめてしまうと、胃腸の働きが止まり、そのために、命に関わる事態になる可能性があります。

前歯の長いのは比較的わかりやすいのですが、問題は口の奥の歯です。これは特別な器具を使って口の中を覗かないと見えないため、ウサギの飼い主はこの歯が伸びすぎているかどうかを知らないことも多いものです。

しかし奥の歯の臼歯が伸びすぎているウサギは、大量のヨダレを垂らしたり、うまく噛むこともできないことがありますので、解ることもあります。

### ウサギの歯の伸びすぎを予防する方法

うさぎの歯が伸びないようにする方法はありませんが、歯が伸びすぎないようにする方法はいくつかあります。

- 1) 繊維質の多い食事 - 食物繊維が豊富な食事を与えることで、うさぎの歯を摩耗させることができます。野生のウサギには、歯の伸びすぎはまずありません。いつも動きながら、いろいろな新鮮な草のみを食べているからです。野生にはペレット(人工固形飼料)がありません。ペットのウサギには干草、牧草、ケールなどの葉野菜等が良いでしょう。
- 2) 噛むおもちゃ - 噛むことはウサギの歯の健康に欠かせないので、安全なものをたくさん用意しましょう。安全な木材や植物のブロック、うさぎ専用の噛むおもちゃ、手作りのおもちゃなどが良いでしょう。
- 3) 口腔内検査- 何よりも重要なのが、歯が伸びすぎているか、毎週できるだけチェックしましょう。奥歯は解りにくいですが、口が開いた時に素早く見れば解るかもしれません。しかし噛む動作でも解るかもしれません。年に1回は動物病院での診察をお勧めします。

うさぎの食事の80～90%は、オートテンや牧草などの繊維質である必要があります。残りの食事は葉物や野菜にし、ペレットやその他のおやつは最小限にして、与えないようにします。

### 成長しすぎたウサギの歯の治療

治療は全身麻酔をかけて、伸びすぎた歯を平らにすることが、治す唯一の治療法です。

また動物病院では、食べなくなったウサギには、歯のX線検査を行います。これらの歯の治療は、前歯(切歯又は門歯)と後歯(臼歯と後臼歯)で多少違って来ます。

前歯の歯を削る、伸びすぎた歯を切断する場合は、何か犬用の爪切りのようなもので、切ることは危険です。歯にひびが入ったり割れたりする危険性が高いからです。また、歯の神経まで、短く切りすぎてしまうと痛みを感じる場合があります。

動物病院では、歯科用のデンタルバーのような、手持ちのロータリーツールを使って、余分な歯を切り落とします。この方法には、より高い技術を必要とします。これを安全に行うには、ウサギが怖がらないように鎮静剤を投与しますが、麻酔も必要とすることもあります。

また後歯の場合は、前歯より難しいものです。上顎の奥歯の成長は年間 10cm～13cm、下顎の奥歯は年間で 13cm～20cm 伸びると言われています。奥歯の場合には麻酔か深い鎮静鎮痛剤が必要です。

ウサギの口は、約 1 cm 前後しか開かないので、奥が見えにくいのです。通常獣医師は、検鏡を使用して口から入れて奥を観察します。奥歯を削るには、歯科用バーや特殊な歯やすりを使用します。時に抜歯が必要ですが、これは歯の X 線検査を参考にして判断します。

特に下顎等に膿瘍が出来て、膨らんだ場合や、上顎部においては眼が腫れる、眼が大きく出てきた場合も膿瘍が原因（伸びた歯が突き刺さる）になることがあるので、膿瘍の切開と同時に原因となる伸びた歯の抜歯が必要となります。

また歯の問題として、不正咬合の問題があります。いわゆるオーバーショット（いわゆる、出っ歯）と言う、下の歯列が上の歯列より短いため、適切な咬合が得られないことが原因とされています。いわゆる、噛み合わせが悪くなります。これは本来、遺伝的な問題です。難治性の遺伝子が原因です。臨床的には、食欲不振、体重減少、まれに下顎の歯が口から飛び出していることもあります。

不正咬合の治療は、麻酔をして曲がった歯を出来るかぎりに切断したり、削ったりして、短くして、上下が出来るだけ、噛みあうように修正します。これであまくいかない場合は、最終的には、歯を抜歯します。

また歯が折れる、すなわち骨折したりすることもあります。原因は遊びすぎて、歯を引っ掛けたり、ぶつかけたりして、喧嘩したりして起こる外傷です。たとえウサギが骨折しても、通常は症状を現さないのがつかないことがあります。治療する場合は、短くして、上下を合わせたり、歯を抜いたりします。

まれに起こる歯の病気としては、歯根の感染症が起こります。これは主に切歯に起こります。症状としては、主にはよだれ、とか口が臭いとか、食べるものを選んで口にする等です。治

療は抗生物質療法ですが、治りにくい場合は、問題となる歯を抜歯したりすることもあります。

- 1) Ashbrook.FrankG.Pasteurellosis,inRabbits.VeterinaryRecord95(6):129,1974.3.Gibson.CharlesS.-

三鷹獣医科グループ・新座獣医科グループ 代表

日本動物病院福祉協会認定の内科認定医

特定非営利活動法人、小動物疾患研究所 理事長 小宮山典寛